

マグネットホスピタル目指し連携

平成 26 年度に開院する新長崎市立病院（新市立病院）は高度医療と救急医療を柱に、医療人が集うマグネットホスピタルを目指しています。新病院の役割やビジョン、さらには国際都市の特性を活かした魅力づくりをテーマに、長崎市長の田上富久氏と長崎市病院事業管理者の兼松隆之氏に語ってもらいました。

高度医療と救急医療を柱に

河野氏 新しい長崎市立病院が平成 25 年度に完成し、平成 26 年度から開院予定と伺っています。水辺の森公園の前という立地で景観にも恵まれているようです。新病院について、どんな理念やビジョンをお持ちですか？

田上氏 時代が動く中で、医療機関の役割分担や連携がとても大事になってきています。新市立病院がどういう役割を担うべきかを議論する中で、高度医療と救急医療の機能を重視した方向性を見い出してきました。特に高度医療についてよく言われるのが「頭」と「心臓」と「がん」をしっかり受け持っていくということ。救急医療については 24 時間 365 日、重症まで診れる救命救急センターをつくらうと計画を立てているところです。地域医療を考えたとき、長崎大学病院を頂点とする病院群の中で、その次をしっかり担っていきたいと思います。

河野氏 新市立病院は市民病院と成人病センターが合併して、一つの病院になります。実は私は昔、成人病センターに勤務していたときもあったんですよ。市の職員だったんです（笑）。昭和 59 年ごろ、当時から市民病院との合併の話がありましたが、院内外でいろんな考えがありましたし、地域の人たちにとっては病院が遠くなるから不便だという話もありました。

しかし国の施策や診療報酬、医師不足など、医療

現場を取り巻く状況は刻々と変化しますので、今となっては一緒になって機能を強化する方向性でよかったと思います。新病院のベッド数はどうなりますか？

兼松氏 一般病床が 500 床、結核病床が 13 床。総計 513 床の病院となります。

河野氏 医師会の先生方も市民病院には救急を担ってほしいと強い要望があるようですが、具体的に救

病院長

河野 茂氏



Kohno Shigeru

こうの・しげる
1950 年生まれ。
長崎大学医学部卒。
専門は呼吸器内科学。
2009 年 4 月より現職

急に関してどうお考えですか？

兼松氏 ER 型をうたっていますので、いわゆるウオークインの患者さんから救急車搬送の重症患者さんまで対応するのが役割だと思っています。

河野氏 そうですね。市中の病院や新市立病院でできるだけ 1 次、2 次を中心に診ていただいて、より複数の診療科にまたがる高次のケースについて大学病院で、と役割分担ができればと思います。

市内では輪番病院もありますので、そちらとの話も重要になってきますね。そのあたりはどのように

お考えですか？

兼松氏 市の中心部では2次救急に取り組んでいる病院との連携が大事になってくると思います。どこがどういう機能を担うのか、形をつくっていく作業が必要です。南や北については中心部と違った事情がありますので、別個に体制を考える必要があります。地域の救急医療を守るという視点で今後検討していかないとはいけません。

河野氏 市医師会との先生方との連携をどう考えますか？



兼松氏 新市立病院は急性期を主体としますので、ある程度治られた患者さんのその後については周辺の病院との協力が大切になってきます。患者さんは高齢化していますので、一つの治療で完結することはなかなかありません。ある治療レベル、ある目標まで達成したら、患者さんの社会的な機能をどう回復していくか、地域の先生方と連携していかないとはいけません。患者さんの紹介を受けたらきちっと対応して逆紹介していくというシステムを構築していきたいと思います。

独法化で弾力的な運用図る

河野氏 今まで兼松先生は外科の教授として、大学で長年、研究に診療に教育にと携わっていましたが、

これからは市民全体の健康を守る責任者という立場です。新しい市立病院をどういった方向に導いていきたいですか？

兼松氏 一番大事なのは市民が望む医療を提供していくことです。長崎地域全体の医療の中で新市立病院と周辺の病院がどう連携を取っていくか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

もう一つ大事なのは、病院で働いている医師や看護師、いろんな職種の人たちが日々満足していただける環境づくりを目指していくことです。

田上氏 現在の市民病院は「狭い」「老朽化している」「スタッフの動線が動きにくい」という声を聞きます。できるだけ早く新病院を完成させて、何よりも患者さんや市民に安心してもらえるようにしたいと思います。同時に医療スタッフの確保にも努めていきたいです。

河野氏 建物だけでなく、病院として体制を変えられるようですね。つまり独立行政法人として市の職員から脱したような雇用のあり方など、ソフト面の充実も図っているようですが。

田上氏 これまで医師の確保にしても定数の縛りがあったため、自由に医師や看護師をそろえるのが難しく、弾力的に運用できない状況でした。独立行政法人化すれば、そういう意味で経営体として一番いい医療を効率よく、臨機応変に動ける体制を模索できるのではないかと考えています。既に長崎大学病院で河野先生にお手本を示していただいているように、これまでできなかったことを自由に実現できればと思っています。兼松先生もいろいろと考えてくださっていますので。

兼松氏 今後も職員の労働環境の改善につながる取り組みをやっていきたいと思っています。勤務状況などを見て、経営として見通しが立つようなら、もう少し楽に働いてもらえるような対策をその都度考えたいと思っています。

河野氏 高度医療に取り組むなら、看護師の数を十分に確保することが大事になってきます。7対1の看護を実現するのは難しいですからね。特に研修医をはじめとして、若手の医療人を集めるためにも工夫が必要になってきますね。

大学病院と協力した研修も充実へ

兼松氏 高度医療からプライマリーケアまでできる病院が理想ですが、そのためには医師の確保が大きなテーマです。ところが全国的に医師不足と言われる中で、医師を集めるのは厳しい状況です。それは大学でも十分感じてきました。

経験のある医師を集めることも重要ですが、卒業したばかりの研修医を集めることにまず取り組みたいと思っています。病院に新しい人が入ってきますと、全体に活気があふれます。先輩医師が後輩を指導する関係ができれば、病院は活性化します。そうすると経験のある医師たちもその病院で働いてみようと思うはずですよ。

河野氏 長崎大学に要望することはありますか？

田上氏 いい若手医師を確保するためには、まずは長崎大学病院との協力体制をしっかりとつくることだと思っています。大学病院や新市立病院での研修だけでなく長崎市内で研修を受けると、こういうことができるという選択肢を広げたいと考えます。例えば、長崎市は離島や野母崎などの僻地を抱えています。市内の病院で僻地医療などいろんな体験ができるようになれば、研修医にとって魅力的な地域として認識していただけるようになるのではないのでしょうか。そのためにも長崎大学病院が核となって、ともに相乗効果を生み出すことができればと思います。

河野氏 医学部から120人が卒業しても、今の長崎大学病院だけではせいぜい研修医として残る数は40人か50人程度です。昔は100人を超えていましたが、70人までがやっとという現状です。若い人の声に耳を傾けると、大学病院での教育とともに、市民病院のような第一線の現場で研修をしたいと思っています。大学病院のよさと市民病院のよさ、それぞれを連携するのが理想だと思いますし、今後そういう方向で進めていけたらいいですね。

兼松先生は外科医として全国でもご高名でご活躍されていますが、外科医のリクルートについてはどうでしょうか？特に先生のご専門である肝移植などの高度医療の分野では外科医の育成は必要だと思います。



ますが。

兼松氏 外科の現場の魅力を、医学生のと時から伝えていくのが大事なことだと思っています。今、大学での教育は大きく変わってきています。従来の見学型ではなく、学生をチーム医療の一員として参加させるという方法を取るようになりました。外科の場合は手術という大きなイベントを経験して、患者さんが良くなっていくのを自分で見て触って感じながら学んでいきます。その中から外科の魅力を見出し出していけると思います。例えば内視鏡の手術が入ってきたり、移植医療が入ってきたり、今後医療界が目指す再生医療が入ってきたりしますと、外科を志す若者が増えてくるのではないのでしょうか。

河野氏 兼松先生の外科医としての腕を考えると、非常に惜しいのですが、市民のために私たちも期待しておりますし、大学病院と新市立病院がいろんな医療分野で連携を広げていければと思います。

国際都市の特徴を活かした取り組み

河野氏 市長は2期目の公約として「新しい都市づくりや地域コミュニティの再生」を挙げられていますが、その中で新市立病院はどのように位置づけられているのでしょうか？

田上氏 新病院は地域的というと観光地にあり、出島バイパスの入り口にある交通の要所です。そういう意味でも景観的な調和や道路と病院の敷地の接点の空間の共有への配慮が必要になってきます。長崎全体にとってもプラスになり、さらに観光客にとってもいい感じだと思っていただけるようにしたいと思います。

河野氏 確かに長崎は観光都市ですし、今から上海

からの船も近くに接岸されるようになるんですよ。陸路から海路からいいところにありますからね。

兼松先生は65歳で定年を迎えられ、今回の就任は新しいチャレンジですが、3、4カ月のご経験はいかがですか？

田上氏 議会の初答弁もありましたね（笑）。



長崎市病院事業管理者

兼松 隆之氏

かねまつ たかし

1945年生まれ。

長崎大学医学部卒。

専門は消化器外科。

長崎大学医学部

第二外科教授を経て、

2011年4月より現職。

長崎大学名誉教授

Kanematsu Takashi

兼松氏 皆さんにご迷惑おかけしています。ただし市民病院には大学病院と違った魅力があると思っています。一方で課題もあります。医師や看護師をいかに集めるかという件では、ほかの施設にない特徴的なものを旗印として示すことが大事だと思っています。長崎市は国際化を推進していますので、新市立病院はそれに対応できる病院を目指します。長崎には年間16万人の海外からの観光客が宿泊しています。一番多いのは韓国、台湾、中国、アメリカ。長崎で病気になった場合の受け皿として、海外の観光客や在住の外国人に安心して受診してもらえる病院にしたいと思います。そういう意味でも職員に対して語学教育は必要ですし、3年目以降の研修医のプログラムでは海外で学べる機会をつくっていきたいですね。

田上氏 7月にスーダンと長崎の子どもたちが外科を通して交流する「ブラックジャックセミナー」がありました。兼松先生が発案された企画です。これ

こそ長崎にふさわしいと思いました。日本の子どもたちだけでなく、2つの国の子どもたちが一緒に何かに取り組むイベントは長崎にぴったりです。長崎の子どもたちが外に出る機会も増やしたいですし、いろんな皆さんが長崎を訪れて子どもたちと交流していただけたらいいと思います。

兼松氏 今年7月9日、スーダンは国が南と北に分かれました。東日本大震災のボランティアをしている川原尚行医師がスーダンの子どもたちを宮城県に招いて交流する企画を立てていましたので、是非その子どもたちを長崎にも招待しようとなったわけです。その流れで今回のセミナーを企画しました。

長崎には歴史的に見ても国際交流の素地があります。出島の役割が大きかったように、海外との交流はずっと今も続いていますし、これからも続けることでさらに新しい文化が開けると思います。それはスーダンの子どもたちを見て感じましたね。2つの国の子どもたちは最初は別々のところに座っていても、時間が経つと自然と一緒に作業を始めるんです。

河野氏 参加した子どもたちが大きくなったら、是非、地元で医学を学んでもらいたいですね。

田上氏 今回のような経験から医師を目指すようになれば、10年後には地元の医者が増えるんじゃないでしょうか（笑）。

兼松氏 中学生なので5、6年でしょう（笑）。

田上氏 長崎は新しい総合計画をスタートしました。その中のビジョンの一つに、世界都市を目指そうとあります。ニューヨークや東京などと比べて、人口規模などまったく桁が違いますが、「世界としっかりつながって世界に貢献できる街」「小さくても世界に評価される街」になることを掲げています。今の長崎大学が持っている医学という力を通して、世界に貢献できるはずですよ。今度、長崎大学は平和研究所をつくらうとされていますので、その中で医学は強いチャンネルになると思います。

河野氏 そうですね。長崎という土地柄を活かして、医師育成などさまざまなテーマで、いろんな企画が共にできたらいいですね。本日は有意義なお話をありがとうございました。